中国・台湾訪問記
再来一杯茶《3》
(お茶をもう一杯下さい)

※阿里山の高山茶

何度も台北に来ているが、台北の空はいつも曇っている。台北には快晴が無いのかと思っていたある日、台湾桃園国際空港に着いて空を見たら何と快晴ではないか。「素晴らしい日本晴れだ！いや・・、台湾なので台湾晴れか？」

天気が良いので気分も爽やかに、台湾に来たら必ず行く台北市吉林路408号の上園茶荘に向かった。上園茶荘はウーロン茶の販売店で、阿里山の高山茶を売っている。台北でも阿里山の高品質の高山茶は上園茶荘でしか扱っていないようだが、これはたまたま偶然に見つけた店である。

台湾に80回位行った内の最初の頃、夕食を済ましてホテルに帰った時に、ロビーの片隅でウーロン茶の試飲販売をしていた。販売員の勧められるまま試飲した所、なんとも良い香りと高貴な味であった。「再来一杯茶(お茶をもう一杯ください)」を何度か言い、数杯飲んだ。もちろん直ぐに買って帰国して飲んだが、香りと味は試飲したお茶とまったく違っていて美味しくなかった。試飲したお茶が欲しくて台湾に行く度にウーロン茶を片端から買って飲んだが、あのホテルのロビーの片隅で試飲したお茶の味を見つけることができなかった。

4～5年経過したある時に妻と台湾旅行に行った際に、現地のガイドが台北の小さなお茶屋に案内してくれた。このお茶屋が上園茶荘である。ここで試飲したお茶が、あのホテルのロビーで飲んだお茶と同じ香りと味で、お茶の名前は阿里山の高山茶で、標高は鳥海山よりも400m以上高い2,663mの阿里山のお茶であることを知った。老闆(ラオパン／意：店主)によると、ある程度標高が高くて霧の掛かる場所のお茶が最高に良いのだそうである。老闆の話を聞きながら「再来一杯茶」と言い、何度も試飲して高山茶を買って帰る。

この高山茶であるが、買う季節によって微妙に味が違う。また10年以上飲んでいるが、だんだんに味が落ちているように感じて老闆に聞いてみた。そしたら「お茶の木は、7～8年から10数年が一番美味しくて、それを超えると味がやや落ちる」とのこと。しかし味がやや落ちても、他のウーロン茶に比べたら雲泥の差である。

さて阿里山のお茶の高貴な香りであるが、ある時偶然にこの香りと同じ香りを発見した。晩秋のある日、高崎市の自宅周辺を妻と散歩していたら、生垣の小さな白い花に大きな黒い蜂が夢中になって蜜を吸っているのを見つけた。妻に「この木は何？」と尋ねたら、「これはお茶の木よ」と教えてくれた。この生垣は背丈より少し低く直立に剪定してあって、良く見かける丸い形に剪定していなかったので、お茶の木とは気が付かなかった。その花は実に高貴な香りで、阿里山のお茶の香りと同じである。ウーロン茶の製法は知らないが、阿里山のお茶には茶の花の香りが付いているようだ。注意しなければいけないのは、人工香料を付けて高級ウーロン茶として売っているのに引っ掛かることである。このお茶を試飲したことがある。確かに味も香りも良いのだが、香りが強すぎて飲み込んだ後に若干嫌味を感じた。しかしほんのわずかな嫌味なので、これが分からない人にはこれも美味しいウーロン茶として良いかも知れない。

※包子

京鼎小館の看板

さてお茶も飲んで買ったので、次は夕食である。台北に来て必ず行くレストランがある。それは台北市敦化北路155巷13号の京鼎小館(ジン・ディエン・シィアオ・グアン)の小龍包などの包子(パオズ)を食べるお店である。台北で包子と言えば東京にも支店がある鼎泰豊(ディエン・タイ・フォン)であるが、あまりにも有名になりすぎていつも混んでいて居心地が悪い。京鼎小館も鼎泰豊に負けず劣らず大変に美味しいので、台北に来たら必ず寄ることにしている。

京鼎小館には妻と台湾旅行したら一緒に必ず行くし、中学校の同級生を連れて行った時も好評だった。

包子と酸辛湯(中央の小椀)

このお店の包子は、セイロでテーブルに持って来る。一つのセイロには10個の包子が入っているので、1人よりも4～5人で食べた方が、色んな包子を食べられる(写真の中央下の20個入りの包子が入っているのは2倍入り)。

私は必ず注文するのが、小龍包と蟹包子や海老包子である。スープは少し辛味で酢をベースとしたスープ、「酸辛湯(スワン・ラー・タン)」。他に炒めた空芯菜と、お決まりの台湾ラガービールである。台湾ラガービールは、ほんの少し香りがするのが好きだ。もちろん「再来一瓶啤酒(ビールをもう一本下さい)」と言って何本か飲み、お腹一杯になって帰る。

※中国式マッサージ

腰痛で悩まされていた時があった。何しろ椅子に座ったら痛くてすぐに立ち上がることできないし、電車に乗ったら車内の揺れが腰に響いて辛かった。もちろん通院して治療していたが、1～2日の効果でそれを過ぎるとまた痛さに悩まされた。

ある時に台湾旅行した時に台北のマッサージ店に行った。按摩士が私の体に触ってすぐに「腰が悪いね！」と言って施術し始めた。そのマッサージの痛さは目から火が出るようだった。しかしマッサージが終わった後腰が軽くなった感じで、その後ひと月程は腰痛の悩みが無くなった。この経験以来、台湾に行く機会があったら必ずマッサージ店に行くようにした。

中学校の同級生数人と中国の桂林に旅行に行った時に、旅行社のガイドが「マッサージ店は、財布の盗難など危険だから紹介する店以外にいかないように！」と脅かされた。しかし簡単に脅しに乗らない私は、現地人が行くマッサージ店に入ってみた。1時間の値段はガイドの紹介の店の1/10の500円位だった。また特に危険を感じることなく、滞在の3日間毎日通い続けた。一緒に行った同級生は、最初怖がって行かなかったが、最終日の3日目に一緒に行くことになった。その店のマッサージはかなりハードで、女性のマッサージ士が仰向けに寝て、両手両足を上に突き出して患者の背中を乗せて空中に浮かせる逆エビ状態にして背筋を伸ばすのだった。3日間慣れていた私でもこの時は痛くて思わず声を上げてしまう。それを薄目で私を見ていた隣の同級生は、「これは無理なので私にはやらないように言ってくれ」とのことで、無視しようと思ったがそのまま素直に中国語で言ってあげた。終わった後、皆爽快な顔をしてそのマッサージ店を出たのであった。

台湾・中国に行く機会があたったら、是非中国式按摩の体験をしたらどうでしょうか。

地盤調査・土質試験・土地家屋調査
土木設計・一般測量・さく井調査

株式会社 ジ オ
Geo Co, Ltd

代表取締役 佐々木 秀人
取締役 佐々木 進(昭和40年採鉱科卒)

本社 東京都調布市東つつじヶ丘3−41−31
〒182−0005
TEL 03(3308)7591
FAX 03(3308)7597
E-mail：geo@msj.biglobe.ne.jp

※楊貴妃の長安へ

西安の楼閣

かつて長安と呼ばれていた西安は兼ねてから行きたい所だったが、4月上旬にようやく妻と旅行をすることができた。春先だったためか、各名所旧跡に花びらが桜にそっくりのやや赤みかかった美しい花が、そこら中に咲いていた。「桜かな？」と思って幹を見たら、桜の木とまったく異なっていたので、ガイドに何の木かを聞いた。ガイドも木の名前を知らず、近くで花見をしていた老人に聞いてくれた。その結果、「日本語で何というか知らないが、李子(リーズ)」と答えた。すかさず私は、「それはスモモだよ！」と教えた。私は中国語が堪能だった訳ではなく、たまたま覚えていたのである。中国語は同じ発音の単語がたくさんあり、微妙なアクセントで区別する。特に「リーズ」はスモモのほかに、栗・梨・粒子も同じ発音で、アクセントが微妙に違うことから中国語初心者が覚えておくと便利な単語だ。

※長恨歌の翻訳に挑戦

ガイドが案内してくれた名所に、唐の時代の玄宗皇帝と中国4大美女の一人である楊貴妃が入ったと伝わる温泉があり、ガイドが玄宗皇帝と楊貴妃の悲劇を詠った白居易の長恨歌の話をしてくれた。そこで帰国してから翻訳に挑戦することにした。

私が翻訳に使ったのは、台湾の故宮博物院が発行した唐詩三百選の本である。その長恨歌は七言120行詩の長い唐詩で、全て2行で一つの事を表す、聯(れん)で創られている。そう言えば高校の古典の授業で、中国詩は聯で構成されているのを習ったことを思い出した。したがって長恨歌は60聯で構成されている。

この唐詩は、『玄宗と楊貴妃の出会い』から始まり、『西暦755年の安史の乱』、『翌年の春、玄宗と楊貴妃が蜀(現：四川)に落ちて行く途中で、侍従の兵の要求で玄宗の意に反して楊貴妃を処刑した』こと。『乱が落ち着き長安に戻って、楊貴妃を失って元気のない玄宗のために、高僧の弟子が黄泉の楊貴妃に会いに行き、玄宗と楊貴妃だけしか知らない言葉を聞く』までを詠っている。なお杜甫の有名な唐詩・春望の『国破れて山河在り　城春にして草木深し・・』は、反乱軍に捕まり、脱出した後にこの体験を詠った詩である。

黄泉の楊貴妃が高僧の弟子に伝えた玄宗と楊貴妃だけしか知らない言葉は、玄宗と楊貴妃の二人しかいない所で話した「天に在るならば比翼(ひよく)の鳥に、地に在るならば連理(れんり)の枝になるのを願いましょう」で、比翼の鳥とは、雄と雌が体をピッタリ付けて一羽の鳥のように飛ぶ空想の鳥のこと。また連理の枝とは、二本の枝がくっついて一本の枝になることで、両方とも夫婦愛の深いことを表す言葉である。なお連理の枝であるが、『群馬の森公園』で偶然に発見した(写真)。

右奥の木の枝と、左の木がつながっている「連理の枝」 群馬の森公園で

長恨歌の翻訳終了後に既に翻訳されているのと比較してみたら、日本で発行されている本の詩と、漢字が数ヶ所異なっているのを発見した。最初は台湾の本の誤植ではないかと疑ったが、もしかしたら中国と日本で違いがある可能性がある。実は、私は他の詩で中国と日本で一部漢字が違い、意味も異なる漢詩を数首発見している。中国では幾度か朝廷が変わったが、この時に漢詩の一部の漢字が変わってしまった詩がある。日本で伝わっている漢詩が原作(オリジナル)と思われる。

※西安の演舞場

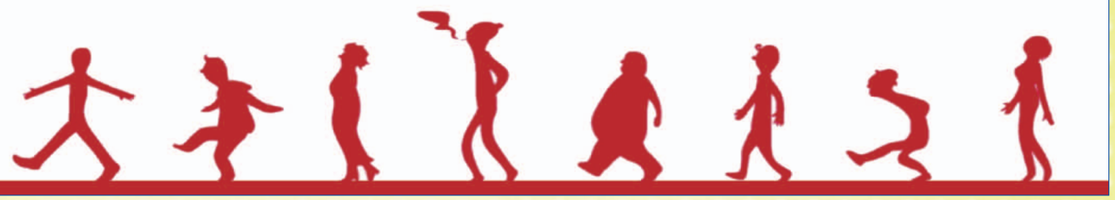
西安の演舞場：唐時代の衣装で宮廷音楽を演奏

西安での夕食は立派な演舞場であった。演劇を見ながらの夕食で、入場した時には既に満員であった。演舞場であるが客席にはテーブルがあり、小姐(シャオジエ／意：ウエートレス)が料理を持ってくる。

「飲み物は何にしますか？」と聞かれたので、ビールを注文した。飲み終えたらすぐに、「再来一杯啤酒(ビールをもう一杯下さい)」と言って追加し、西安の演舞を堪能した。

演舞の他にパンフルートを見事に操る婦人の演奏があり、これには感動した。パンフルートは長さが異なる筒を数本束ねた楽器で、筒に唇を当てて鳴らす。それはビンの口に唇を当てて、息を吹き込んで鳴らすのと同じ要領だ。この楽器は音程を変える度に違う筒に素早く唇を移さなければならなく、演奏がとても難しい楽器として知られている。彼女の演奏はパンフルートの演奏の難しさを感じさせない、まるで小鳥がさえずっているような素晴らしい演奏だった。

追記) 日本の朝廷は渤海国を通じて安史の乱を知った。朝廷は当時留学中だった阿部仲麻呂に、渤海経由での帰国要請を出したそうだ。しかし長安と渤海国の間に反乱軍の地である漁陽(現：北京～天津)があり、危険なそこを通らなくてはならないためか帰国をあきらめたエピソードがある。渤海国は現在の北朝鮮の北部・中国東北部の東側海岸部とロシアの一部の沿岸部にあった国で、日本とは遣渤海使を介して頻繁な交流があった。

◆記 事 嵯峨 良平(昭和43年電気科卒)

写真同好会からのお知らせです
メンバー募集中!!
楽しく愉快な仲間と写真を撮ろう！
Wonderful memories of life